Digital Campus Consortium

早稲田大学
デジタルキャンパスコンソーシアム

第 6 次 DCC 2016 年度活動報告

目次

✧ 第6次DCCの目的 ·· 1
✧ 1. ボーダレスな知の循環による教育改革 ···································· 2
(1) 授業システム･授業形態の革新
(2) 学修ポートフォリオの確立と学習意欲の高揚
(3) オープン教育ネットワークの展開
✧ 2. 国際化の次なる段階を生き抜くグローバル人材の育成 ··························19
(1) グローバル人材の育成
✧ 3. 新たな産学連携シーズの開拓と成果の発信·······································23
(1)産学交流フォーラム
(2)広報機能の強化
✧ これまでの成果 ···28
✧ 運営体制･会員企業一覧 ··29

第 6 次 DCC の目的

第６次 DCC では、これまでの DCC の活動の中で築いてきた基盤やノウハウを継承し早稲田大学が「Waseda Vision 150」で掲げる理想（グローバルリーダー育成のための教育体系の再構築、対話型・問題発見・解決型授業への移行、教育と学修内容の公開など）の実現を目指し、**ICT 活用による新たな価値の創造**を目指します。

具体的には、ICT を活用した教育をさらに推進することにより、**リアルな授業を革新**（対話型・問題発見・解決型授業への移行）し、**その成果を公開**することにより、**オープン教育ネットワークの展開**につなげていきます（教育と学修内容の公開）。また**国際化の次なる段階**を視野に入れつつ、**多文化融合社会を生き抜くグローバル人材の育成**を目指します（グローバルリーダー育成のための教育体系の再構築）。

さらには、それらの成果をもとに**産学連携をベースとした知の国際連携**のもと ACC （Asia Cyberlearning Community）を実現し、**社会貢献**を果たします。

◆第６次 DCC 活動内容

１．ボーダレスな知の循環による教育改革
２．国際化の次なる段階を生き抜くグローバル人材の育成
３．産学連携による知の国際連携

１．ボーダレスな知の循環による教育改革

（１）授業システム・授業形態の革新

2016 年度は ICT を活用した教育支援システムのさらなる普及により「対話型、問題発見・解決型授業」への移行を実現することを目指し、活動をしてきました。リアルな授業に革新をあたえる ICT 活用を視野に入れ、システムを提供するのみにとどまらず、効果的な活用法を提示し、普及の仕組みについてもあわせて検討を進めました。

１）　リアルな授業を革新する ICT 活用の推進

DCC アクティブラーニング検討部会では幹事会員企業ならびに準幹事会員企業とともに授業を革新する ICT ツールの活用について議論を行いました。以下に各会員企業による報告を含め掲載します。

➢ **わせポチへの機能追加検討　（日本電気株式会社様　寄稿）**

MyWASEDA のアクティブラーニングツール(クリッカー)である「わせポチ」をさらに効果的に活用されるものにすること、また将来的な他大学・他機関への展開も視野に入れ、DCC 作業部会にて機能拡張に関する議論を行いました。シンプルでより使いやすいシステムにする為、実際の授業の流れをブレークダウンした上で、クリッカーにどのような機能があればより有効かを検討しました。

具体的には「タイマー」「グループ分け」「発表者指定」「アイスブレイクのテーマ提供」などの機能改善案検討と、利用シーケンスまでの落とし込みを実施しました。

➢ **グループワーク向けツール（株式会社東和エンジニアリング様　寄稿）**

アクティブラーニング部会の活動の一環として、ネットワークを介したマルチデバイス対応のプレゼンテーションツールのご紹介、デモンストレーションを行いました。
ケーブルを使わないので、場所の限定がなく複数の人が同時に画像や Web、ppt などをディスプレイなどに簡単に表示することができるものです。弊社内では、グループミーティングや報告会で利活用しています。今年度は、具体的に授業で活用いただくまでには至りませんでしたが、善し悪しも含めて色々なご意見をいただけたことは、我々にとって大きな収穫となりました。今後は授業でお試しいただき、学生の方々のご意見や活用方法を見出していきたいと考えています。

◆Beacon を利用した情報発信ツール

Beacon（ビーコン）を用いて、スマートフォンやタブレットに自動的に情報発信ができるツール（Cleva!）をご紹介させていただきました。Beacon から発する信号によって、場所を特定することで、学生や先生が「その場所」で使えるツールや学習ブースの空き状況などを自動的に受信することができます。現在、キャンパスツアーの参加者向けに、経路案内やスポットの紹介を自動的に発信する仕組みとして活用できないか検討をしています。他大学では、ラーニング コモンズなどの学習スペースの混雑状況やオープンキャンパス、災害時の情報発信への利用があるため、今後も学生、教職員の皆様へのサービス向上にかかわる活動に繋げていきたいと考えています。

◆Web 会議（Skype など）の教室利用

従来のビデオ会議システムに加えて、Skype を利用したビデオ会議のご要望が増加していますが、教室内の設備との接続・設定には入念な事前準備が必要です。そこで、新たに映像・音声信号を USB 信号に変化する機材を用いて、より簡便に利用できるよう検証を行いました。今後も、学内外とのコミュニケーションが活性化するように、教室、学習スペースでの利用サポートに組みこめるように試行錯誤を行っていきます。

➢ **「手書きデジタルツールを活用したピアレビュー教育環境の実現性についての検証」**
（ソニービジネスソリューション株式会社様　寄稿）

早稲田大学栗崎教授の授業においてデジタルペーパーを活用したピアレビューの有効性やその実現性の検証を実施した。仮想ＬＭＳを構築し、学内無線ＬＡＮからの接続運用を可能にし、2016 年 10 月から 2017 年 1 月の期間、計 5 回の授業で実践しましたので下記のとおり報告いたします。

◆活動の目的

ソニー製デジタルペーパーと仮想 LMS を用いて、手書きデジタルツールを利用したピアレビューの有用性や実現可能性を実際の授業の中で実証する。

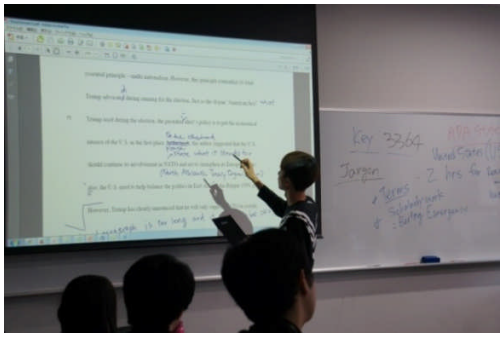
◆実証実験概要

担当教員：早稲田大学 政治経済学術院　教授　栗崎　周平
授業名：Freshman Seminar
学生　：16 名
期間：2016 年 10 月 13 日～2017 年 1 月 26 日までの計 5 回の授業
授業の流れ：

1．授業時間外に課題本を読み、論文を書く。
2．デジタルペーパーを用いて論文のピアレビュー及びルーブリックに基づいて評価を行う。
ファイルのやりとりは仮想 LMS を通じて行う。
3．授業では、先生が仮想 LMS に接続し、ピアレビューされた論文をプロジェクター上に表示する。
4．レビューワーに添削の意図を説明させ、それを元にレビューイーや他の学生を交えた議論を行う。

【先生が仮想 LMS に接続し、ピアレビューされた論文をプロジェクター上に表示】

【学生は一人一台デジタルペーパーを持ち、論文確認やノートをとる】

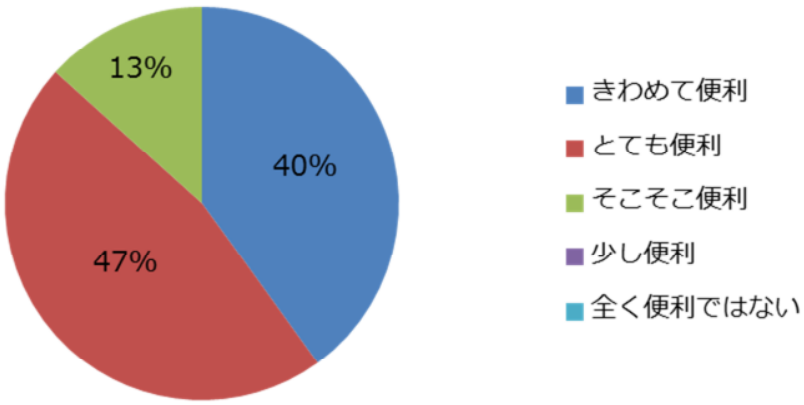


【レビューワーの学生が添削の意図について説明】

【レビューイーや他の学生を交えて議論】

◆学生へのアンケート結果

デジタルペーパーはピアレビューに便利だったか？



特筆すべきコメントとして以下が挙げられた。

【便利な点】

・添削からアップロードまでが簡単にできる

・軽く持ち運びしやすい

【不便な点】

・学内 Wi-Fi 環境下でしかアップロード、ダウンロードができない

・反応が遅い

◆栗崎先生からのコメント

・従来の方法とデジタルペーパーを使った場合を比較し際の有用性について
デジタルペーパーを使った時の方が従来と比較し、学生による活発な添削が行われた。従来は添削には Word のコメント機能を使っていたが、これと比較し、デジタルペーパーを用いた場合、査読している流れで直接論文に書き込めるという点で学生にとってのピアレビューのハードルが低いからだと考える。このことより、デジタルペーパーを用いることでピアレビューはより積極的に学習プロセスに学生が参加すると言う点で有効である。

・今後の期待について
今回はデジタルペーパーと繋がった仮想 LMS を使用したが、学生の情報の登録や、学生へのオリエンテーションなど、専用のシステムを利用する際には初期投資が大きく、教員の負担となる。
今回利用した仮想 LMS のような機能を普段から慣れ親しんだ LMS との連携によって実現できると良い。

◆2017 年度にむけた活動課題

今回の実証実験ではデジタルペーパーから仮想 LMS への接続は、学内 Wi-Fi 環境下に限定されていたが、アンケートを通じて学生から、自宅からも仮想 LMS への接続ができるようにしてほしいとの要望が多く寄せられた。自宅など学外においても、自由にデジタルペーパーから LMS に接続できる環境を整備することで、学生の授業外の学習時間の増大に寄与できると想定される。また、先生からのご意見にもあるように、今後デジタルペーパーをより効果的なツールに発展させるために、実際の LMS との連携が重要だと再認識した。今後の活動として、次の DCC の活動の中で、デジタルペーパーとピアレビュー機能が実装された LMS との連携実現による有効性の検証に取り組んでいきたい。

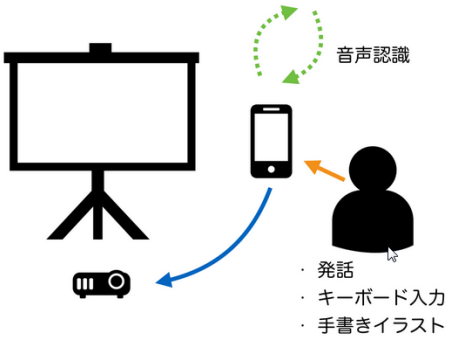
➢ UD トークアプリによる難聴学生の支援

UD トークアプリとは、音声認識機能などを搭載したスマートフォン用のコミュニケーションアプリです。現在、本学の難聴学生支援ではボランティア学生がノートテイカーとして活躍していますが、サポートに十分な時間、人的資源を割く事が困難な状態で、本アプリ導入によって、ボランティア学生の負担の軽減・効率的なサポートが期待できます。

主な機能は以下の通りです（http://udtalk.jp/about/　より引用）
・音声認識エンジン AmiVoice®（アミボイス）を使って、会話／スピーチをリアルタイムに文字化します。
・多言語翻訳機能によるリアルタイムに文字翻訳します。
・音声合成機能によって内容を読み上げることができます。

また将来的には、本アプリを利用して、難聴学生の支援のみならず、会議体のユニバーサルデザイン化や、音声認識機能を活用した動画講義コンテンツの字幕付与に役立てることも期待できます。

【使用イメージ図（http://udtalk.jp/extend/　より引用）】



➢ 第 4 回 WASEDA e-Teaching Award 開催

WASEDA e-Teaching Award は、早稲田大学における ICT を活用した授業の Good Practice を表彰しています。特に教育効果を上げている ICT 活用教育事例を表彰し、顕在化させ、その教員と教育手法を早稲田大学の優れた教育事例として公開することで、本学の教育内容の可視化を進め、社会からの評価を求めることを目指しています。

本 Award にエントリーされた取り組みには、DCC の支援によって確立された ICT 活用教育の手法が反映されているものが多くあります。2015 年度の第 4 回には、15 件の ICT を活用した幅広い e-Teaching の取り組みが集まりました。

審査員による厳正な審査ならびに学生・教職員からの一般投票により、以下とおり 5 件の授与を決定し、2016 年 4 月 22 日に表彰式および受賞者講演を実施しました。また、惜しくも受賞を逃した事例も、甲乙つけがたい優れた取り組みであることから、「WASEDA e-Teaching Good Practice 賞」を授与しました。

【WASEDA e-Teaching Award 大賞】

タイトル	教員
Web クリッカーなどを活用して大人数クラスで学生の主体性を促す	畠山　卓朗（人間科学部学術院　教授）

【WASEDA e-Teaching Award】

タイトル	教員
国際コースとの共同授業開始を契機に オンデマンド授業を導入。 演習時間の大幅増も増加できた	高安　亮紀（理工学術院総合研究所　次席研究員） 関根　晃太（基幹理工学学術院　助教） 森倉　悠介（基幹理工学学術院　助教）
Course N@vi の活用により高い学習効果が望めるフルオンデマンド授業を実現	堀井　俊佑 （グローバルエデュケーションセンター　助教）
先端的 WEB ツールに基づく授業を動画としてオープン化：知の分野で世界にアピールする社会貢献	松山　泰男　（基幹理工学学術院　教授）
Skype を通じて海外の日本語教師の生の声を聴き、教科書や文献とは異なるインプットで理解を更に深める	毛利　貴美　（日本語教育研究センター　准教授）

第 5 回 WASEDA e-Teaching Award 実施に向けて

2016 年度には第 5 回 WASEDA e-Teaching Award を実施しており、11 件のエントリーがありました。第 5 回は、第 1 回～4 回の受賞者を審査員とし、審査員による審査ならびに学生・教職員からの一般投票により授賞事例を決定します。表彰式は 2017 年 5 月を予定しています。

2）　アクティブラーニングを実現する学習環境の創造

➢ **対話型、問題発見・解決型授業への移行―3 号館 2 階　CTLT Classroom**

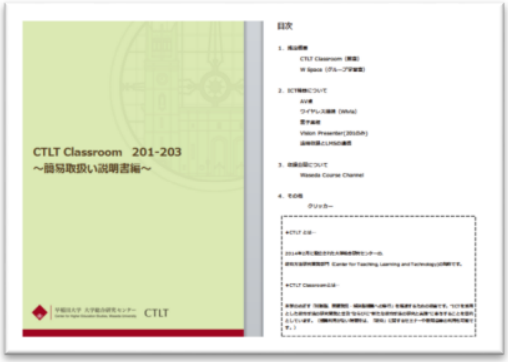
2014 年度秋より開設し、2015 年度はデジタルペーパーや貸出用端末（スマートフォン、タブレット）を導入したが、2016 年度は当該教室の環境や ICT 機器に関する認知、普及活動に取り組みました。授業利用での稼働率は 70%でした。授業利用前には教員やスタッフによる ICT 機器の確認、TA との打合せ、授業利用後には議論が盛り上がり延長、サブゼミの開講など。それらのバッファーをふまえ教室配当を行っているため、適正な稼働率といえます。スポットで利用する授業では、九州の大学との TV 会議システムを使用した合同ゼミや、wivia を使用した学生発表などに活用されました。

授業外の利用では、イベント、セミナーの会場として以下の通り、有効利用されています。

・図書館、ライティングセンターや障がい学生支援室の学修支援のための勉強会
・大使館や企業による公演会、ワークショップ
・産学官連携プログラムの実施会場
・高校生のためのキャンパスツアー
・現役学生と校友の交流イベント会場

◆CTLT Classroom 201-203[簡易取扱い説明書]

全 14 ページ（PDF）にわたり当該教室利用に関する事項をまとめた簡易マニュアルです。授業利用を予定する教員対象にメールで送付しました。机・イスが可動式だからという理由のみで当該教室を利用している教員もいるが、そのような教員に当該教室の充実した ICT 環境を知ってもらうきっかけとなりました。これをきっかけに今後の有効活用が期待されます。

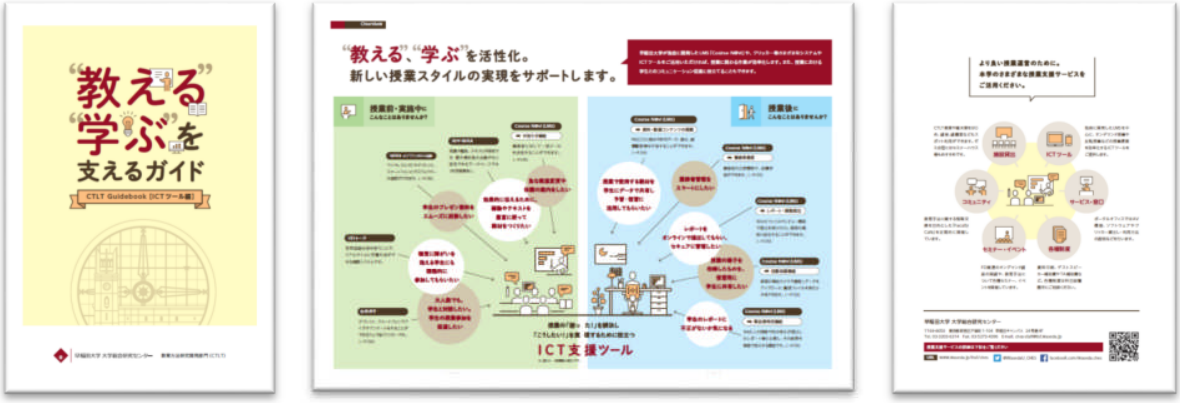


◆Good Practice & Tips 集

自動収録システム（教室の固定カメラで講義を収録、LMS にアップロードできるもの）を活用した事例を 2 件紹介しました。当該教室以外にも 3 号館、31-33 号館で利用できるため、収録の利便性や学生の自学習効果などを効果的に PR することができました。

◆CTLT ガイドブック[ICT ツール編]

全 8 ページ。CourseN@vi(LMS)はじめ「わせポチ」、wivia など授業に役立つ ICT ツールを紹介しています。



CTLT Classroom の目的

本学のめざす「対話型、問題発見・解決型授業への移行」を推進するための教室。“ ICT を活用とした教育手法の研究開発と普及 ” ならびに “ 新たな教育手法の研究と実践 ” に寄与することを目的としている。授業利用がない時間帯は「教育」に関するセミナーや説明会等のスポット利用可能。

CTLT Classroom の特徴

①対話型、問題発見・解決型授業への移行

→机やイスが可動式、ホワイトボードも複数設置しておりグループワークや議論を行いやすい仕様である。

②教育と学修内容の公開

→自動収録設備で講義映像の収録からアップロード迄を手間なく行うことができる。

③ICT の活用

→各自のデバイスからワイヤレスで、プロジェクターに投影ができる。TV 会議システムで他ｷｬﾝﾊﾟｽや協定校との共同授業ができる。

➢ **学生の自習・グループ学習を促進させる―3 号館 2 階、7 号館 1 階　W Space**

W Space は 2014 年度秋に 3 号館、2015 年度秋に 7 号館に開設された学習スペースで、多くの学生に活用されています。2016 年度(2016 年 4 月～2017 年 1 月迄の集計とする)は利用総数 14,562 件、利用人数 57,600 人であり、今後も増えることが予想されます。昼休み、4-5 限の時間帯が集中。学生有志の勉強会など、より広いスペースやプロジェクター使用の需要などが確認されました。

◆W Space　PR 動画

W Space7 号館の PR 動画を制作しました。学内のサイネージや Web サイト上で配信しています。

W Space の目的

学生のグループ学習等、複数人での学習を目的としたスペース。学生が大学への提言をプレゼンしあう Waseda Vision 150 Student Competition（2012 年度）にて金賞を受賞した「チームわせ女」が提案した、学生が交流や活動などで気軽に使用することが出来るスペースを具現化した施設。

W Space の特徴

①学部学年を超えて集まることができる空間

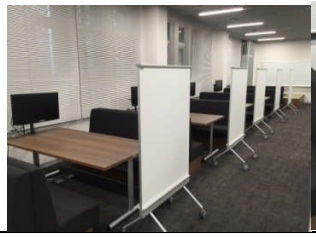
→ファミレスのような Box シートや、畳のスペースもあり、いつ、誰とでも気軽に利用できる。

②学生の熱気、活気が感じられる

→時間帯によって、朝は静かに自習する人／昼はランチをしながらノートを広げている人／夕方以降はグループ学習で満席状態。といつも活気にあふれる。

③ICT の活用、ステューデントジョブの導入

→ノート PC やプロジェクターの貸出しを行っている。運営は学生アルバイトが行い、学生目線でラーニング・コモンズ活用、学習支援策の企画につなげている。



➢ アクティブラーニング検討部会

【目的】
DCC 会員企業のシステムやソリューション等を活用した理想的なアクティブラーニングの展開モデルについて検討します。

【2016 年度体制】

部会名	座長	副座長	メンバー
アクティブラーニング	SBSC	㈱東和エンジニアリング	NEC、PSN、DCC 事務局（CTC,アルファコンピュータ㈱）

SBSC：ソニービジネスソリューション株式会社
NEC ： 日本電気株式会社
PSN： パナソニックシステムネットワークス株式会社
CTC: 伊藤忠テクノソリューションズ株式会社

【2016 年度達成】

① 「アクナビ（Active Learning Navi）」
アクティブラーニング検討部会における検討をもとに教員がアクティブラーニングを実施するにあたりその手法や利用できる ICT ツールや具体的な活用事例を知ることができるサイトとして「アクナビ（Active Learning Navi）」を構築しました。2017 年度は掲載する情報を拡充し、教職員のニーズを反映し、より便利で使いやすくなるようブラッシュアップする予定です。

② W Space 内展示ブース出展内容の検討

【出展趣旨】
・W Space 内におけるグループワーク等を支援する ICT ツールの有用性の検証
・アンケート実施による学生のニーズ把握
・アクティブラーニングやラーニング コモンズの利用状況調査

7 号館ならびに 3 号館の W Space に期間限定の展示ブース出展企画をアクティブラーニング部会にて募集したところ、6 社、9 企画の応募がありました。学内で検討した結果、希望出展時期ならびに展示対象物品の準備状況などを考慮し、以下のとおり二段階に分けて実施することとなりました。

【第一弾 ４月中旬～】
・アルファコンピュータ株式会社
・ソニービジネスソリューション株式会社
・東和エンジニアリング株式会社

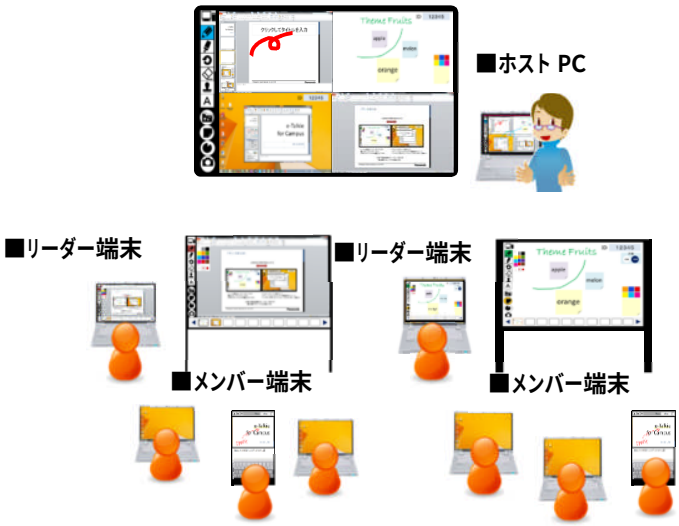
【第二弾 ５月中旬以降】
・日本電気株式会社
・パナソニックシステムネットワークス株式会社
・株式会社早稲田大学アカデミックソリューション

【出展システム概要】
「アクティブラーニングを支援し、議論の活性化やアイディアの創発を促す教育 ICT システム」(出展一例：パナソニックシステムソリューション株式会社様)

○主な機能：「共有書き込み」 機能、
「付箋（カード)」 機能
感想・評価機能 他

○システム特性：BYOD 端末利用可能
サーバーレス利用可能
マルチ OS 対応

＜イメージ図＞



（2）学修ポートフォリオの確立と学習意欲の高揚

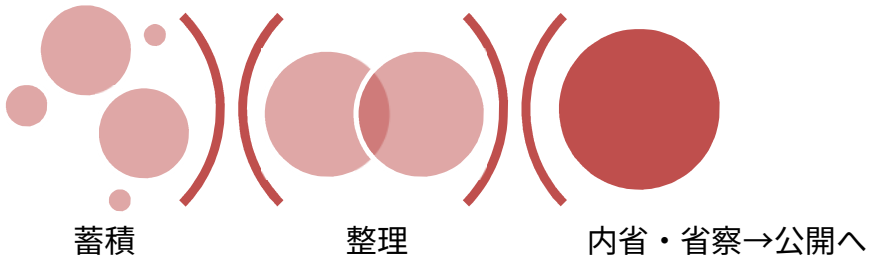
1）ポートフォリオシステムの構築

➢ **課外活動データベースの構築**

学生の入学から卒業までのあらゆるアクティビティを可視化することにより、自身の学習成果を俯瞰したうえで、振り返ることができる機能としてポートフォリオシステムの導入準備を進めました。2016年度は昨年度中に検討を行った「課外活動データベース」の構築を進め、各データ管理箇所によるデータの蓄積を開始しました。（例：全課外活動プログラム数 228 件、全課外活動履歴 40,453 件(3/1 段階。学生公認サークル、学生寮における活動が未登録の段階の数値です。）課外活動データベースにはサークル活動やインターンシップ・ボランティア活動など学生の在学中におけるあらゆる活動の履歴が登録されるため、学生はそれらの情報を参照したうえで、振り返りやあらたな目標の設定などを行うことが可能となります。

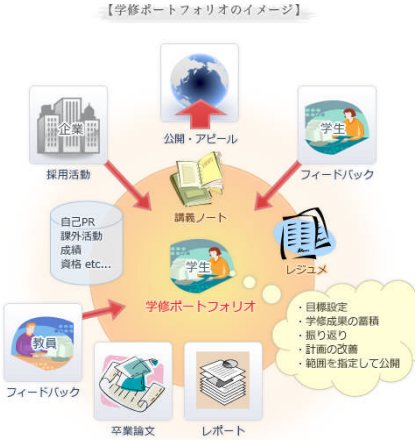
➢ **ポートフォリオシステムの構築ならびに就職活動への活用**

ポートフォリオシステムの基幹プラットフォームとして OSS のポートフォリオシステム『Mahara』を導入しました。Mahara の基本機能に加え、履修科目一覧と課外活動履歴についてはプラグインを開発し、学生が参照や振り返りが可能な画面を提供します。また Mahara で作成したポートフォリオのデータを就職活動に活用するため、外部の就職活動サイトとのデータ連携についても検討を開始した。2017 年度中には学生が学び、さらに成長するプロセスをサポートするシステムとして、また学生が就職活動を行う際に、大学生活で得た知識や行った活動をアピールする情報基盤構築として展開していく予定です。



※ご参考―Waseda Vision 150「3.教育と学修内容の公開」より抜粋

＜目的・目標＞
授業のみならず学生のレポートや論文などの学修成果物も含めて公開する。公開方法は、既存のインターネットによるオンデマンドシステム、オープンコースウェアなどの活用や、学修ポートフォリオを構築し、レポート等だけではなく、自己PR なども発信することが可能となり、就職活動のツールとしても役立つことになる。
＜改革のポイント＞学修ポートフォリオを構築し、学修成果や学修履歴、課外活動等を公開することにより、振り返りや新たな目標設定に役立てるとともに、新たなキャリア形成支援ツールとも する。



http://www.waseda.jp/keiei/vision150/core/03.html

３）企業の人材発掘に寄与するポートフォリオの運用検討

➢ **企業ヒアリングの実施**

就職の現状および学修ポートフォリオの運用を検討するに当たり、企業側にどのようなニーズがあるかについて 2016 年 6 月 23 日にソニービジネスソリューション株式会社、2016 年 8 月 1 日にパナソニックシステムネットワーク株式会社の２社に対してヒアリングを行いました。

➢ **シンポジウム開催**

2016 年度 10 月４日（火）に CTLT 主催/DCC 共催にて第 4 回 DCC 産学交流フォーラムを開催しました。

（※以下、パナソニックシステムネットワークス株式会社様の寄稿文を加筆修正のうえ掲載。）

1．早稲田大学　第 4 回 DCC 産学交流フォーラム

【日程】　2016 年度 10 月 4 日（火）

【テーマ】　大学生が身につけるべきスキルとは？　－産学のギャップを埋める－

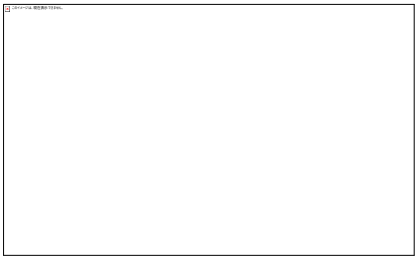
【講演者】（敬称略）

中島　好博(ＰＳＮ　執行役員　人事・総務部　部長)

北島　久嗣(ＳＯＮＹ　人事センター採用部統括部長)

日向野 幹也（早稲田大学　大学総合研究センター教授）

【内容】　採用現場における「企業が求める人材」について講演、人材ポートフォリオの活用方法についての提案を行う



【PSN　中島氏】

【Sony 北嗣氏】

【日向野　教授】

CTLT と DCC との共催で実施されたフォーラムのテーマは「学修ポートフォリオ」と「リーダーシップ教育」。企業からはパナソニックシステムソリューションズ株式会社の中島様、株式会社　ソニーの北島様に企業における採用の現状と課題、ポートフォリオに対する期待等についてお話しいただきました。続いて大学総合研究センターの日向野教授からは「権限を持つものがリーダーシップを発揮すべきだと考えられてきた従来の考え方とは違うリーダーシップのあり方」について講演いただきました。権限を持たない者でも他の者と協力をして成果をあげ、目標を達成することができる、それはトレーニングによって養成が可能だということでした。またリーダーシップは面接によって見抜くことが難しい、証拠に基づいた過去の実績でみるのが一番確実な方法で、大学での実績の記録、すなわちポートフォリオは有効であるとの示唆もありました。

大学総合研究センターでは、現在、学修ポートフォリオシステムをどのように活用していくべきか検討をしています。学内外での学びや活動を通じて学生本人が自分の活動を振り返り、先の学修計画をたてるのに役立てられるほか、学びの証明書のような役割を担えるようになればよいと考えています。このような仕組みが実現されれば、企業側からすればエントリーシートと面接で採用の可否を決めるのではなく、ポートフォリオを参照することによりミスマッチが軽減されるようになるかもしれません。

（3）オープン教育ネットワークの展開

全授業公開に向けた教育内容のデジタル化および公開促進を推進するため、教室授業の自動収録システム等の収録設備の拡充と整備を行いました。また従コンテンツ制作・配信ツール「Waseda-net Commons」の後継プラットフォーム「Contents Creation Studio」を導入し、2017 年度からの本格利用開始に向けて準備を進めました。

1）教育・学修内容の公開促進

➢ **自動収録システムを活用した Good Practice**

自動収録システムでは、あらかじめ収録日時を登録しておけば、教室に設置された固定カメラを用いて教室授業を収録することができます。収録したコンテンツは、Course N@vi や Waseda Course Channel などから配信することが可能です。

法学学術院の上野達弘教授は、担当科目の「法学演習（知的財産権法）」で本システムを活用して模擬裁判風のディベートの収録を行っています。本システムの活用により、以前は、音声のみ記録だったのが、身振りや手振り、動作のクセなども、目で見て確認できる利点を挙げています。

法学学術院　上野達弘教授　Good Practice 記事
http://www.quon.asia/yomimono/waseda/GP/2016/07/01/5941.php

【授業風景】

また、教育・総合科学学術院の神尾達之教授は、担当科目「複合文化学演習」で、(1) 欠席した学生のフォロー、(2) プレゼンを行った本人の振り返り、(3) 前年度の「ベストプレゼン」による学習　を主な活用法としています。就職活動等で欠席せざるを得ない学生が本システムで収録された動画を確認することで、授業に参加した学生と同様に Course N@vi 掲示板機能などでプレゼンに対する感想や意見などを書き込むことができる利点を挙げています。

教育・総合科学学術院　神尾達之教授　Good Practice 記事
http://www.quon.asia/yomimono/waseda/GP/2016/07/01/5940.php

【自動収録 画角イメージ】

あらかじめ MyWASEDA から収録日時の申請を行うと、スケジュールに従い、教室内に設置されたカメラが起動し、自動収録を行います。収録を行うとタリーランプが点灯します。

➢ **Contents Creation Studio 導入による手軽な動画コンテンツの作成**

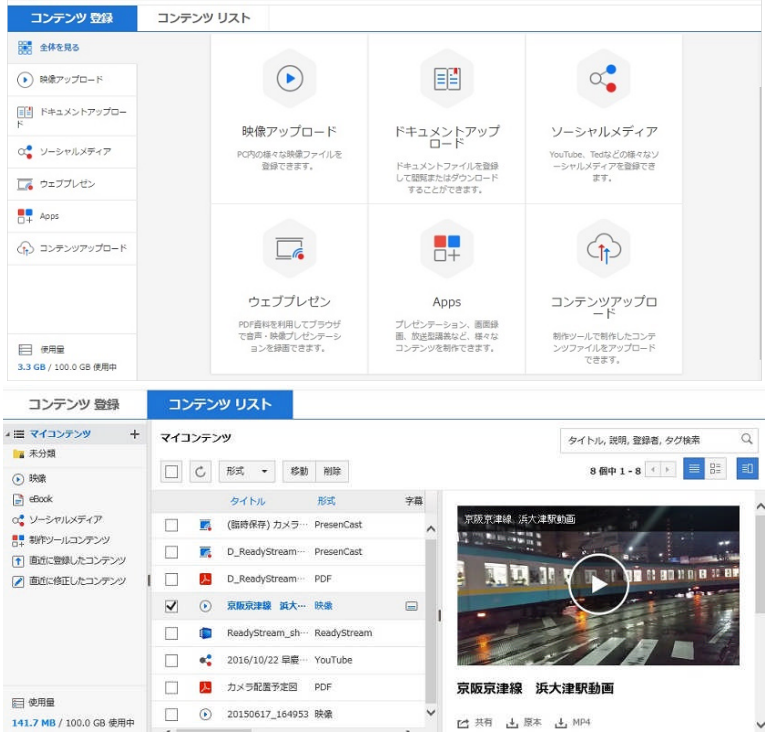
Contents Creation Studio は、映像、ドキュメント、ソーシャルメディア資料などの様々な知識コンテンツの登録や、リアルタイムプレゼンテーションの録画など、自分でコンテンツを制作して登録することができるコンテンツ制作/管理プラットフォームです。

主な機能として、以下が挙げられます。

・コンテンツ（動画、ドキュメント、YouTube のようなソーシャルメディアなど）アップロード機能
・コンテンツに対する字幕登録機能
・プレゼンテーション動画制作機能
・コンテンツ視聴機能
・コンテンツ配信・共有機能

上記機能を活用して数多くのコンテンツを一元管理し、様々な用途にて配信/共有することができます。

【コンテンツ管理画面】

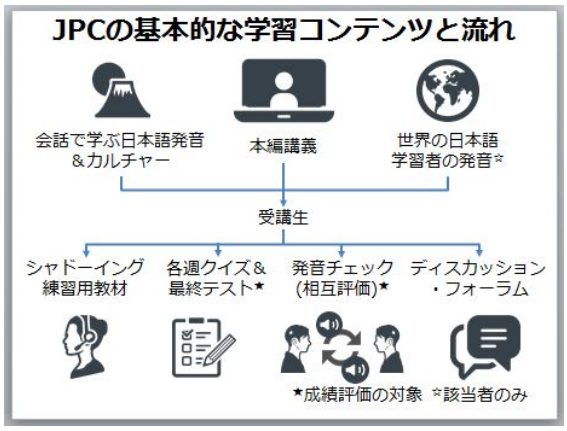


２）MOOC の戦略的活用推進

➢ edX における第二弾講座の公開

2015 年 9 月 28 日、米国における MOOC の代表的なプラットフォームである edX と講座配信に関する提携契約を締結しました。2015 年度はその第一弾講座として、理工学術院・柴山知也教授による ”Tsunamis and Storm Surges: Introduction to Coastal Disasters ” を 2016 年 1 月 18 日より配信し、Introduction を含めて 7 週間にわたり、3 月 21 日まで開講しました。

2016 年度は日本語教育研究科の戸田貴子教授による「Japanese Pronunciation for Communication」を 11 月 7 日より 5 週分の教育コンテンツを配信し、12 月 19 日に閉講しました。登録者は当初目標としていた 5,000 名をはるかに上回る 12,000 名を超え、世界各地の日本語学習者や日本語教育従事者、関係者より好評が得られました。



この講座は、多くの日本語学習者が課題として感じる「発音」に特化し、イントネーションやアクセントの特徴について担当講師から解説の後、音声のシャドーイング教材でオンラインながらも練習できるように設計しました。また、毎週、指定の発音テキストを読み上げ、自分の発音した音声を録音し、学習者同士で相互採点することを課題としました。さらには、日本語教育研究科の卒業生で、現在世界各地で日本語教育を従事している教員から、それぞれの母語話者による発音の課題の紹介ビデオレターを公開しました。これらに合わせて、「会話で学ぶ日本語発音＆カルチャー」のコンテンツを制作し、大学の卒業式、ビジネスシーン、原宿のポップカルチャーなどの会話シーンを想定し、日本文化を紹介しながら生活の場における生きた日本語を世界に向けて発信しました。

この講座のもう一つの特徴は、世界各地の様々な日本語学習者のレベルに合わせて、日本語、英語のみならず、中国語、韓国語、インドネシア語、ベトナム語、タイ語の翻訳を提供したことです。今後も日本語学習者や日本語教育関係者により長期にわたり活用されることが期待されます。

講座の最後には、「発音の達人コンテスト」を開催しました。受講者が「発音学習における上達の秘訣」について語った動画を投稿し、２０名の応募者から７名の入賞者を選出しました。あわせて学習者同士による投票の結果、３名を「日本語音声発音の達人」として認定し、「発音の達人証明書」を進呈しました。

受賞者からは、「日本語アクセントの特徴の紹介だけでなく、イントネーションが違うだけ で文全体の意味が異なること、自然な話し言葉の発音はどこに注意すればいいのか、幅広く勉強できた」、「自分の発音に対してフィードバックをもらえることができ、助かった」など喜びの声が寄せられています。

シャドーイング練習教材の画面と訳文の画面

２．国際化の次なる段階を生き抜くグローバル人材の育成

１）グローバル人材の育成

（１）CCDL・サイバーゼミの新たな展開

➢ Cross Country Survey

2015 年度に続き、すべての参加大学で共通の設問を使い、学生による授業の評価を行う「Cross Country Survey」を実施しました。今後、分析結果をもとに、質問項目の見直しと更なるプログラムの改良につなげていきます。

➢ CCDL 国際学生会議

2016 年 5 月、CCDL に参加している早稲田クラスと各大学をビデオ会議システムで接続し、通常の授業の枠を超えて国際学生会議を開催しました。各大学の代表学生が決められたテーマでプレゼンテーションを行い、その後ディスカッションを行いました。活発な意見交換が行われ、通常の授業では交流のない国や地域の学生同士が異文化理解を深める有意義な機会となりました。

＜参加大学＞上海交通大学（中国）、大連理工大学（中国）、
淡江大学（台湾）、南台科技大学（台湾）、
延世大学（韓国）、高麗大学（韓国）、早稲田大学
＜参加人数＞88　名
＜テーマ＞
第 11 回（2016/5/31）：Preservation/ Evolution of traditional cultures in a Multi-Cultural World

➢ **サイバーゼミ　World Englishes and Miscommunication 運営支援**

海外大学との共同遠隔講座「World Englishes and Miscommunication」では、デジタルキャンパスコンソーシアム（DCC）が推進しているアジアサイバーラーニングコミュニティの実現という目標に向けて、国際遠隔共同ゼミ（サイバーゼミ）の科目です。科目には「World Englishes and Miscommunication(応用)01」と「World Englishes and Miscommunication（応用）02」があります。

海外の教員・学生が参加するＴＶ会議によるライブセッションを通じて、学生がオンデマンド講義で学んだことを基に、英語によるプレゼンテーションやディスカッションを行い、実践的なコミュニケーション能力の向上を目指しています。

＜参加大学＞
高麗大学（韓国）、韓南大学（韓国）、文藻外語大学（台湾）、淡江大学（台湾）、デラサール大学（フィリピン）、早稲田大学
＜参加者数＞
海外：182 名、早稲田 29 名、計 211 名

（2）オンラインプレゼンテーションコンペティション

➢ **The 5th Japan Korea Global Presentation Competition**

早稲田大学と韓国・高麗大学が共催し、英語によるプレゼンテーションコンテストを実施しました。

【決勝大会】

第 5 回となる今回は、早稲田大学の 26 号館地下多目的講義室にて、2016 年 10 月 1 日に開催しました。テーマは、「Towards Global Leadership and Citizenship」。たとえば児童婚や実業界における女性の不足問題等、社会的問題を取り上げ解決策の提案を行いました。決勝大会では、惜しくも受賞を逃したチームも含め、会を重ねるごとに参加学生の英語力やプレゼンテーションスキルが向上してきています。第 6 回は会場を高麗大学に移しますが、さらにレベルの高いコンペティションとなるよう努めていきます。

順位	チーム名	発表テーマ
優勝	PnJ（高麗大学）	Female Omnipresence in the Entrepreneurship Realm
2 位	Creative Trio（早稲田大学）	Mission for the Globe: Nurturing Global Citizens and Leaders
3 位	Jion P.（高麗大学）	Sustainable Development for the Eradication of Child Marriage
DCC 特別賞	CONVEX（高麗大学）	Save Our World in Danger with Our Special CONVEX Lens
審査員特別賞（早稲田大学）	Team K.K.（早稲田大学）	Overcoming Stereo types: Show and Tell the World
審査員特別賞（高麗大学）	Team Wisher（早稲田大学）	The Future of Us

森田先生から表彰される PnJ

（株）東和エンジニアリング　山岸様　（DCC 審査員）

山岸様から表彰される CONVEX

【スタディツアー】

早稲田の決勝進出チームは 2016 年 11 月 2 日(水)～4 日(金)にかけ、韓国を訪問しました。現地では、高麗大学ではキャンパスツアーや、ＣＣＤＬの授業に参加するなど、高麗大学を見学し、また高麗大学の学生と一緒の学習も経験いたしました。尚、2017 年 1 月 25 日(水)に開催した DCC フォーラムでは、現地での授業参観、視察また高麗大学との学生との交流などを通して学んだことが参加学生より報告され、JKGPC 決勝大会やスタディツアーを経験したことによる考察の発表が学生よりあり、来場者は熱心に傾聴していました。

➢ Waseda Vision 150 Student Competition

早稲田大学では、中長期計画「Waseda Vision 150」に対する学生からの企画提案をプレゼンテーションコンテスト形式で競う「Waseda Vision 150 Student Competition」を DCC 協賛のもと毎年開催しています。

本 Competition で提案された企画のいくつかは既に実行に移されています。

【本 Competition から実現した主な企画】

・W Space（第 1 回大会「チームわせ女」提案）：学生がグループ学習で気軽に利用できるスペース。現在 3 号館 2 階および 7 号館 1 階で展開中。

・早稲田小劇場どらま館（第 1 回大会「チーム・シアター早稲田」提案）：2012 年にいったんは耐震強度不足のため取り壊された演劇サークルの拠点「早稲田どらま館」が学生の声により復活。

・スチューデントダイバーシティセンター（第 3 回大会「ダイバーシティ早稲田」提案）：多様性が認められるキャンパス作りを指し、ICC (異文化交流センター)、障がい学生支援室、GS センターから構成される「スチューデント・ダイバーシティセンター」を 2017 年 4 月に新設。

・キャリアセンター改革（第 4 回大会優勝チーム「AM1 時 50 分」提案）：入学から就職まで最大限活用されるキャリアセンターの実現を目指し 2017 年 4 月より早稲田キャンパス 6 号館内にキャリアセンター分室（C-Space)を新設。

2017 年 3 月 13 日には、第 5 回決勝大会が行われます。第 5 回には、35 チームがエントリーし、以下の 8 チームが決勝大会に進出しました。

【第 5 回決勝大会進出チーム】

チーム名	概要
田舎の西北	国内初の仮想現実（VR）によるオープンキャンパスの実施により、いつでもどこでも早稲田を疑似体験可能とし、地方学生の志願者増につなげる。
村川さんの会	入試制度改革案「コンペ型入試導入」の提案。在野精神を中心テーマに体験入学とコンペ型入試を通して、早大生の在野精神の醸成を目指す。
早稲田活用部	MyWASEDA の「お知らせ」のカスタマイズ化により、学生も情報発信側も、大学のリソースを最大限に活用できるようにする提案。
チームはやぶさ	運動系サークルが還暦を迎えた校友の「健康づくり」を支援する。運動習慣づくりのお手伝いを通じて、学生と校友の交流を促進する。
早稲田心理学コース	100 円朝食とコラボし、様々な場所で活躍する校友や、同じ業界を志望する学生間の交流を促進するイベントを提案。
W 3 ～W-Cubed～	メンター制度、日本人+留学生のゼミ、語学ボランティアの３つの施策の実現により日本人学生と留学生の交流促進を目指す。
眠れる西北の杜の早稲女	アンケートにより抽出した図書館における課題を踏まえ、①学習環境の改善、②図書館ウェブサイトの改善、について提案する。
チームこめつぶ	大学スポーツの運営における学生スタッフの地位向上と活動機会拡大により、社会で求められる即戦力の人材育成につなげる。

※決勝大会の最終結果については、以下の URL を参照してください。
http://waseda.commonswith.com/contest/vision150/

3.新たな産学連携シーズの開拓と成果の発信

（1）産学交流フォーラム

産学交流フォーラムの定期的な開催や海外における視察調査などを通じ、早稲田大学と会員企業の方々との連携を強化しました。

（1） 会員企業との連携強化

➢ DCC　産学交流フォーラム

「産学交流フォーラム」の定期開催、大学による定期的な情報提供、国内外における視察調査などを通じ、早稲田大学と会員企業との連携を強化しました。

第１回（4 月 22 日）	「第 4 回 e-Teaching Award 表彰式」 受賞者 5 名による受賞事例に関する講演、講評
第２回（5 月 23 日）	「 Tsunamis and Storm Surges: Introduction to Coastal Disasters-edX 講座第一弾　実施報告会 早稲田大学　理工学術院教授　柴山　知也
第３回（7 月 12 日）	「早稲田大学における反転授業の取り組みについて」 人間科学学術院准教授　森田　裕介
第４回（10 月 4 日）	「CTLT 主催 DCC 共催　大学生がみにつけるべきスキルとは？～ポートフォリオは産学のギャップを埋めるか～」 早稲田大学　大学総合研究センター教授　日向野　幹也 ソニー株式会社　人事センター採用部統括部長　北島　久嗣 ﾊﾟﾅｿﾆｯｸｼｽﾃﾑﾈｯﾄﾜｰｸｽ株式会社執行役員　　中島　好博
第５回（12 月 20 日）	＜共催＞「『第 8 回　次世代 e-learning』公開フォーラム」 早稲田大学　大学総合研究センター教授　近藤　祐介 湘南工科大学情報工学科准教授　梅澤　克之
第６回（1 月 25 日）	「The 5th JKGPC 韓国スタディツアー報告」 チーム名：Creative Trio、Team K K, Wisher、
第７回（3 月 29 日）	２０１６年度総会

【第 2 回　柴山教授による edX 第一弾報告会】

第 3 回　早稲田大学における反転授業の取り組みについて】

【第 4 回　CTLT 主催 DCC 共催 大学がみにつけるべきスキルとは？ポートフォリオは産学のギャップを埋めるか】

➢ 海外視察調査（タイ）

アジア各国の教育機関・企業における先進的な ICT 活用教育事例、産学連携の成功事例を調査し、DCC の活動や方向性に対する示唆を得るとともに、会員企業の新たなビジネスチャンス獲得に繋がることを企図した海外視察調査を年に 1 回実施しています。

2017 年度はタイ・バンコクを訪問し、先駆的かつ積極的な取り組みを視察しました。

【日程】
2017 年 11 月 2 日（水）～11 月 6 日（日）

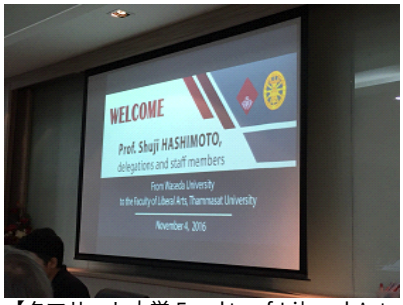
【目的】
1）MOOC をはじめとした教育内容公開に関する動向調査
2）ICT を活用した「対話型、問題発見・解決型授業」や反転授業などの先進的な教育方法の調査
3）ラーニング・コモンズ等情報インフラ、教室環境等に関する調査

【訪問先】
チュラーロンコーン大学　Learning Innovation Center
タマサート大学　Faculty of Liberal Arts, Information Technology Center
国際交流基金　バンコク文化センター
タイサイバー大学
タイ早稲田日本語学校

【参加者】21 名
視察団長：橋本　周司（早稲田大学副総長、理工学術院教授）
メンバー：DCC 会員企業 6 社（※）、早稲田大学教職員、DCC 事務局
※ソニービジネスソリューション(株)、パナソニックシステムネットワークス(株)、日本電気(株)、(株)東和エンジニアリング、アルファコンピュータ（株）、伊藤忠テクノソリューションズ（株）

【視察概要】
11 回目となるこの視察では、タイ王国を代表するチュラーロンコーン大学、タマサート大学、タイサイバー大学、を訪問し、タイにおける ICT 教育活用の先進事例を調査いたしました。あわせてタイにおける日本語教育の現状と ICT 活用のニーズを探りつつ、本学が提供する MOOC 講座「Japanese Pronunciation for Communication」の紹介を行うため、国際交流基金バンコク文化センター、タイ早稲田日本語学校　バンコク校を訪問いたしました。

【チュラーロンコーン大学：会議の様子】



【タマサート大学 Faculty of Liberal Arts にて】

【タイサイバー大学：プレゼンテーションの様子】

➢ 広報部会

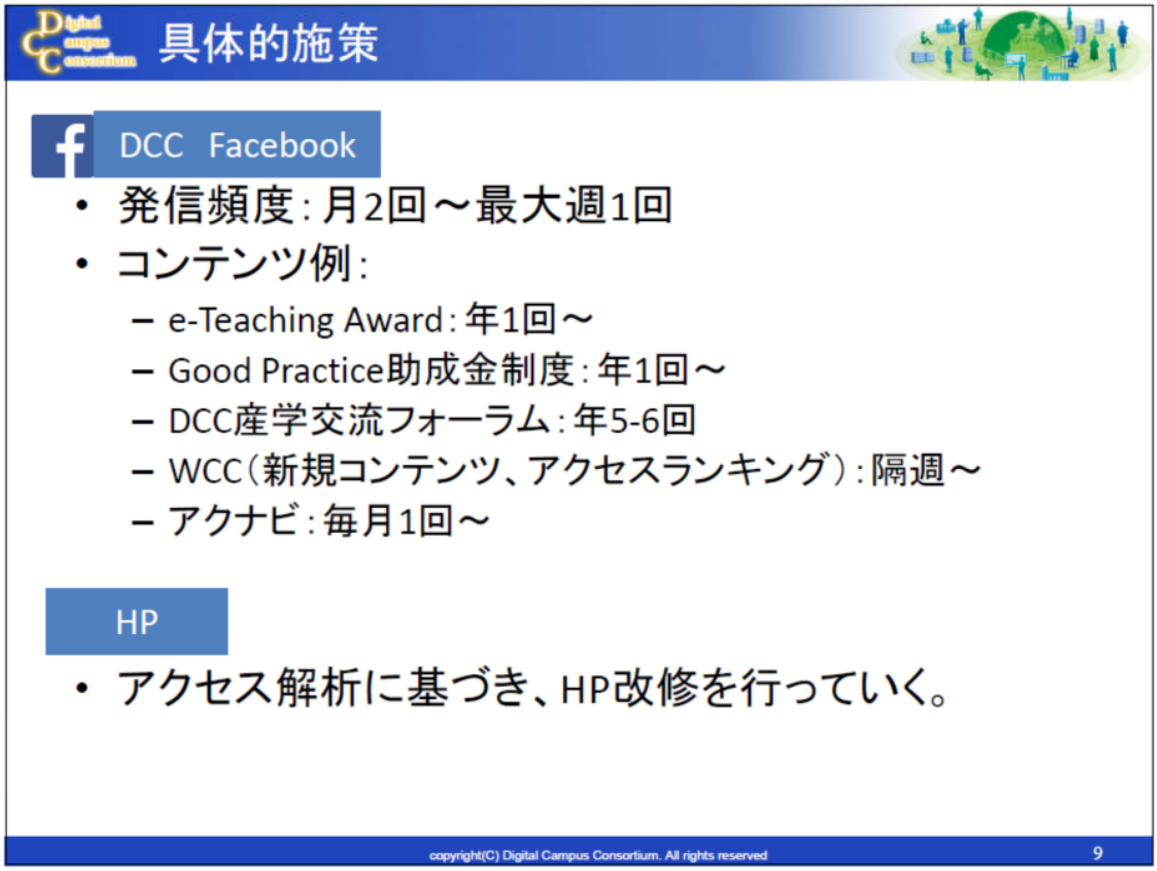
【目的】
DCC の成果を学内外に効果的に周知するための広報戦略を検討し、実行致します。

【2016 年度目標】
① 新たな広報手段の検討

【2016 年度体制】

部会名	座長	副座長	メンバー
広報部会	NEC	PSN	SBSC、東和エンジニアリング、DCC 事務局（CTC,アルファコンピュータ）

【2016 年度活動概要】
- Good Practice 助成金制度
- DCC 産学交流フォーラム実施
- アクナビ



早稲田大学 Digital Campus Consortium(以下 DCC)は早稲田大学と民間企業とが連携したコンソーシアムであり、生涯学習時代に求められる「教育のオープン化」のニーズに応えるため、1999 年に発足しました。「教育分野における産学連携共同体」として数々の教育プログラムを開発してきました。

今後は DCCWeb サイトを年間スケジュールの発信の場として活用し、参加募集中のイベントも周知していく予定です。

また、DCC 産学フォーラムの広報の方法を現状のメールや、MyWASEDA だけではなく、Facebook 等の SNS を活用してより多くの人に発信できるように努めていく予定です。

2）社会貢献活動

➢ **大学・社会連携プロジェクト ― NPO 法人 実務能力認定機構（ACPA）**

2017 年 4 月からの大学設置基準における SD(スタッフ・デベロップメント)義務化を追い風にすべく、ACPA 大学マネジメント・業務スキル基準表(以下、大学スキル基準表という)の他大学への認知度向上と活用促進を重点施策とした各種の取組みを推進いたしました。

【普及・啓発活動】

ACPA 認証認定制度の周知のため、積極的に情報発信を行うとともに、業務効率化・人材育成に関心が高い大学との接点を深めることに努めました。

○2016 年度は下記 3 大学からの要請により大学スキル基準表データを提供し業務改革を支援しました。

2016 年度	3 大学	京都造形芸術大学、宮城大学（公立）、横浜市立大学（公立）

《これまでの提供大学(19)》

・岡山大学　・加計学園　・関東学院大学　・畿央大学　・九州工業大学　・九州保健福祉大学
・京都造形芸術大学　・共立女子大学　・國學院大學　・東京電機大学　・東洋大学　・新潟薬科大学
・福井大学　・宮城大学　・武蔵野大学　・山口大学　・横浜市立大学　・立命館大学　・早稲田大学

○大学行政管理学会への加入および広報活動
大学運営管理に関心が高い大学職員が構成する同学会に正式加入し、研究会活動に参加をしました。また、同学会の 20 周年記念機関誌へ大学基準表の紹介広告を掲載しました。

○「職業人教育の認定評価/筧捷彦・榑松明」を掲載した教育工学選書(日本教育工学会監修・ミネルヴァ書房)が発売されました。

【調査・研究事業】

○小規模部門単位で基準表活用を始めた横浜市立大学の運営事例をプロトタイプとして、活用マニュアルとツールの標準化作業を行いました。

○放送大学からの受託業務として、昨年度大幅改訂した IT 分野基準表に基づき、放送大学情報コース開講科目(36 科目)のスキル項目分析を行い、調査報告書を作成しました。

【実務能力基準表整備事業】

○大学マネジメント・業務/基礎(知識・能力)編の改訂
大学職員の高度専門職能として注目を集めている「インスティテューショナル・リサーチャー（Irer)」、「リサーチ・アドミニストレーター（URA)」、「産学官連携コーディネーター」、「インストラクショナル・デザイナー」を新たなスキル項目として加えた改訂版（Ver1.6）を公開しました。

【認証・認定事業】

○早稲田大学グローバルエデュケーションセンター(GEC)および韓国・高麗大学に設置された ACPA 認証講座の履修合格者に対しスキル認定証明書を発行しました。

○早稲田大学アカデミックソリューション(WAS)が雇用する学生スタッフ向けのビジネスマナー研修を大学マネジメント・業務/基礎(知識・能力)編に基づき認証し、修了学生に対しスキル認定証明書の発行を始めました。

【今後の展望】

大学関連団体(私大連、行政管理学会など)への働きかけを通じて大学基準表の認知度向上を図るとともに、ACPA 賛助会員企業と連携し、大学職員の人材育成と大学業務改善を支援する SD プロジェクト活動の事業化を模索する。

これまでの成果

DCC の活動から始まり、正規授業として定着した教育プログラムの状況
*2006 年度～2015 年度

➢ **インターネットオンデマンド授業**
学生がいつでも、どこからでも、何度でも受講できる授業形態の導入

オンデマンド授業クラス科目数推移

	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
通学制（フル）	100	119	128	122	120	117	127	132	133	147
通学制（併）	341	337	389	362	326	512	677	623	731	806
e スクール	395	439	508	535	545	525	517	494	488	478
合計	836	895	1,025	1,019	991	1,154	1,321	1,249	1,352	1,431

オンデマンド授業科目履修者数推移

	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
通学制（フル）	9,120	12,432	12,005	16,525	20,834	19,185	23,515	29,368	33,343	39,368
通学制（併）	10,007	10,619	13,806	14,026	12,318	29,736	38,011	32,095	34,527	36,851
e スクール	7,045	8,137	9,093	9,049	8,200	7,784	7,619	7,489	7,620	7,029
合計	26,172	31,188	34,904	39,600	41,352	56,705	69,145	68,952	75,490	83,248

➢ **Tutorial English**
4 人 1 組の少人数レッスンによる徹底したコミュニケーション能力の育成

	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
受講者数	約 9,500	約 8,200	約 8,500	約 8,400	約 8,100	約 8,000	約 7,800	約 7,000	約 7,500	約 9,000

➢ **異文化交流実践講座（Cross-Cultural Distance Learning）**
海外提携校のパートナーとのリアルタイムオンラインチャットによる異文化交流

		2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
受講者数		5,305	6,378	7,359	7,965	7,828	7,200	7,499	7,441	5,530	4,634
内訳	早稲田	3,211	3,379	3,477	3,543	3,574	3,306	3,525	2,919	2,519	2,519
	海外	2,094	2,999	3,882	4,422	4,254	3,894	3,974	2,611	2,115	2,115

運営体制

◆理事会

会長	大野　髙裕	早稲田大学 理事 理工学術院教授
副会長	田中　誠	ソニービジネスソリューション(株) 執行役員　営業・マーケティング部門長
理事	山岸　敦	(株)東和エンジニアリング　執行役員 教育ソリューション営業部　部長
	佐藤　誠	日本電気(株)　執行役員
	松川　和義	パナソニックシステムネットワークス（株）　執行役員
	中尾　幸久	(株)早稲田大学アカデミックソリューション　専務取締役
	深澤　良彰	早稲田大学　図書館長　理工学術院教授
	根本　進	早稲田大学　総務部長

◆運営委員会

委員長	足立　心一	早稲田大学　情報企画部事務部長
副委員長	塚本　雅久	日本電気（株）　第一官公ソリューション事業部 マネージャー
委員	山形　裕之	ソニービジネスソリューション（株）　文教ソリューション営業部　統括部長
	今西　雅也	パナソニックシステムネットワークス（株） ｼｽﾃﾑｿﾘｭｰｼｮﾝｽﾞｼﾞｬﾊﾟﾝｶﾝﾊﾟﾆｰ　教育・医療部　部長
	則松 秀昭	(株)東和エンジニアリング　教育ソリューション　営業部　マネージャー
	田島　伸己	(株)早稲田大学アカデミックソリューション　業務支援室　室長
顧問	中野　美知子	早稲田大学　名誉教授

会員企業一覧

◆ 幹事会員

ソニービジネスソリューション（株）
（株）東和エンジニアリング
（株）早稲田大学アカデミックソリューション
日本電気（株）
パナソニックシステムネットワークス（株）

◆ 準幹事会員

アルファコンピュータ（株）
伊藤忠テクノソリューションズ（株）

◆ 一般会員

（株）内田洋行
（株）クレドスペース
シーティ・ネットワークス(株)
シスコシステムズ合同会社
ジャパンメディアシステム（株）
（株）ザイニックス
（株）Ｊストリーム
東通産業（株）
日本アイ・ビー・エム（株）
ネットワンシステムズ（株）
富士ゼロックス（株）
レノボ・ジャパン（株）
ワールドビジネスセンター（株）

以上、20 社（2017 年 3 月 1 日現在）

早稲田大学デジタルキャンパスコンソーシアム事務局

〒169-8050　東京都新宿区戸塚町 1-104
早稲田大学早稲田キャンパス 24 号館 4 階
電話：03-3203-6314
FAX: 03-5273-4396
Email: dcc@jimu-list.waseda.jp
URL: http://www.waseda.jp/dcc/